

JAPAN RESEARCH JOURNAL OF RUGBY FORUM

No. 17 (Supplement) March 2024

ラグビーフォーラム

令和6年3月

日本ラグビー学会

Japan Society of Rugby

日本ラグビー学会第 17 回大会

令和 6 年 3 月 23 日 (土)

会場：関西大学堺キャンパス (A 棟 2 階)

〒564-8680 大阪府堺市堺区香ヶ丘町 1-11-1
南海高野線「浅香山」駅下車、徒歩約 1 分

目 次

1. 大会スケジュール	3
2. 大会案内	4
3. 発表案内	6
4. シンポジウム	7
5. 一般発表タイムスケジュール(口頭)抄録	9

1. 大会スケジュール

一般発表（口頭） 10:30～12:00

SA202 教室

総会 13:00～13:30

SA202 教室

シンポジウム 14:00～15:30

SA202 教室

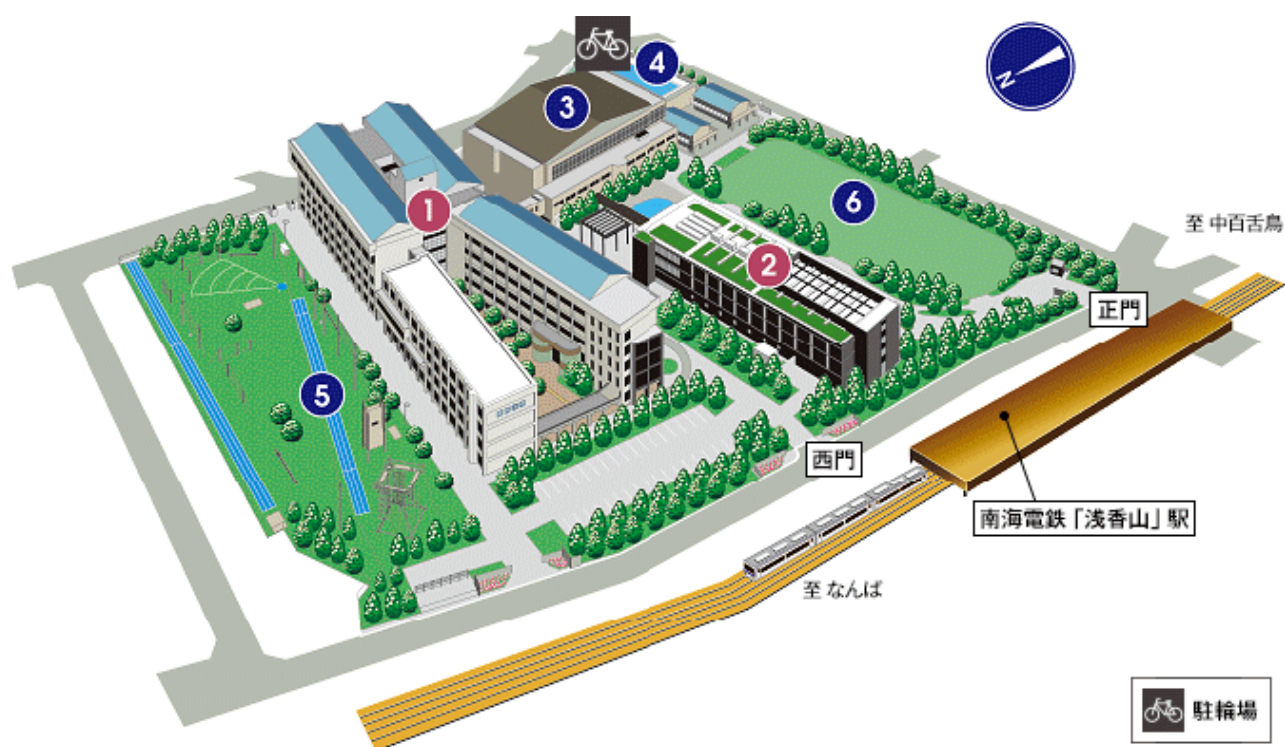
意見交換会 16:30～18:30

B棟1階：カフェテリア

2. 大会案内

a. 会場

- ・ 関西大学堺キャンパス（南海高野線「浅香山」駅下車、徒歩約1分）
A棟2階（SA202～SA204教室）



- ① A棟（教室、堺キャンパス事務室、キャリアセンター）
- ② B棟（教室、堺キャンパス図書館、カフェテリア、購買店）
- ③ 体育館（アリーナ、格技・実習教室、トレーニングルーム）
- ④ プール
- ⑤ 体験学習エリア
- ⑥ Evergreen（広場）

b. 受付

- ・総合受付場所：SA204 教室
総合受付時間：10:30－14:00
一般発表受付：10:30－11:00
- ・大会参加費等
会 員 1,000 円
学 生 無 料
一 般 無 料
- ・必ず受付で入場手続きを行ってください。
- ・学会入会手続きも、総合受付で行っております。

c. 休憩と食事

- ・休憩所：SA203 教室
- ・昼食は、会場周辺の飲食店やコンビニエンスストアに限りがあるので、できるだけご持参ください。

d. 諸注意事項

- ・学内では係員の指示に従ってください。
- ・会場内での携帯電話等の使用を禁じます。
- ・喫煙は所定の喫煙所にてお願いします。
- ・貴重品はお預かりしません。手荷物の管理は各自でお願いします。
- ・大会事務局では盗難や事故について一切の責任を負うことはできません。各自でご注意ください。

e. 大会実行委員会

大会長 石指宏通（奈良県立医科大学）
委員長 灘英世（関西大学）
副委員長 吉矢晋一（西宮回生病院）
委員 青木敦英（芦屋大学）、入江直樹（滋賀大学）、岡本昌也（愛知工業大学）、川端泰三（関西大学）、北畑幸二（有限会社北畑産業）、高木應光（神戸外国人居留地研究会）、森仁志（関西大学）、山田光昭（大阪公立大学）

当日の連絡先：学会大会事務局 携帯 090-5094-4470（灘）

3. 発表案内

a. 発表方法

- ・発表は口頭で行います。

b. 進行

- ・発表者は各セッションとも座長の司会によって進行します。座長の指示を遵守してください。

c. 発表時間

- ・発表時間「10分」・討論「5分」の合計「15分」です。
ただし、フロアーから活発な質問等のある場合には、座長の裁量で討論時間の調整を行ってください。時間厳守でお願いします。

d. 資料配布

- ・資料を配布される方は、各自で準備し、大会当日に持参のうえ、発表受付担当者に提出してください。50部を準備してください。

e. 機器使用

- ・PCはこちらで用意します。発表データを「30分」前までにUSB等でお持ちください。

f. 発表取消

- ・プログラムに掲載されている発表者が、不測の事情によって欠席せざるをえない事情の生じた場合には、大会事務局にできるだけ早くご連絡ください。連名発表の場合には、連名者が、大会本部の承認を得て発表を代行することができます。

g. 座長要領

- ・座長は、各発表会場受付で、受付を行ってください。座長は開始「20分」前までに必ず受付を済ませてください。座長は、フロアーからの質疑等を促し、研究発表の円滑な運営が進行するようにご協力をお願いします。

4. シンポジウム

14:00～SA202 教室

「高校ラグビーの課題と展望」

2015年ラグビーワールドカップ以降、日本ラグビーは日本代表の活躍もあり、かつての人気を取り戻しつつある。その影響もあって、ラグビースクールに入団する子どもが増加しているという情報もラグビー界にとっては喜ばしい話題である。しかし一方で、高校ラグビーは各県の強豪校に部員が集中する傾向が強くなり、特に私立の強豪校では合宿所も完備され、全国各地から入部を希望する生徒が多数詰めかける。その為、都道府県によっては高校ラグビー部の登録数が激減するという二極化現象が進んでいる。その結果、県大会の予選1回戦が決勝戦となる、あるいは予選が行われない地域も出てきた。このような流れの中で、第103回全国高校ラグビー大会は今後の日本ラグビーの将来を左右する大会になったと言っても過言ではない。103回の歴史の中で初めて「合同チーム」が花園の舞台に立った。高校生にラグビーをやらせたいという関係者の英断であり、試合のできない高校ラグーマンにとっての希望の光になったことは言うまでもないが、高校ラグビーが抱えている部員不足の根本的な解決策となったとは言えない。

今回のシンポジウムでは、高校ラグビーに焦点を当てて、部員不足という問題を抱えながら現場で奮起する指導者の立場、その努力を支える高体連役員の立場からご意見を頂戴し、新たな改革について模索しながら、高校ラグビーの未来を考える。

進行司会：村上晃一 氏（ラグビージャーナリスト）

【プロフィール】

1965年京都市生まれ、京都府立鴨沂高校を経て大阪体育大学。ラグビー部現役時代はセンター、フルバックとして活躍 1986年度、西日本学生代表として東西対抗に出場。

1987年4月ベースボールマガジン社入社、ラグビーマガジン編集部勤務、1990年から同誌編集長、98年退社後はフリーランスの編集者、記者、ラグビージャーナリストとして活動をはじめ、JSPORTSのラグビー解説も1998年より継続中で1990年から2019年の6回のラグビーワールドカップでコメンテーターを務める。

著書に「仲間を信じて」（岩波ジュニア新書）、「ハルのゆく道」（道友社）、「ラグビーが教えてくれたこと」「ノーサイド勝敗の先にあるもの」（あかね書房）など多数出版されている。

シンポジスト：プロフィール

吉瀬 晋太郎 先生（福岡県立浮羽究真館高校ラグビー部監督）

1985年、福岡県浮羽町生まれ。父親たちが創設した地域の子供ラグビーチーム「浮羽ヤングラガーズ」に小学校3年生で入部。浮羽高校ラグビー部に入部、3年生の時に福岡県ベスト8。京都産業大学ラグビー部に入部、3年生の時に関西大学Aリーグでプレー、全国大学選手権大会ベスト4メンバー。住友林業株式会社を経て、体育科教員免許を取得。京都産業大学フルタイムコーチ（関西大学Aリーグ7位）を務めたのち、2015年から福岡県立浮羽究真館高等学校ラグビー部監督。2016年からはALL福岡コーチにも着任。JRFUコーチ資格A級コーチ資格取得。日本体育協会公認スポーツ指導者資格取得。B級レフリー（九州協会）公認資格取得。

清鶴 敏也 先生（同志社香里高等学校ラグビー部監督）

1984年同志社大学卒 現役時代はSHとして活躍し、同志社大学3連覇の原動力となる。1984年に同志社香里高校の社会科教員として赴任し、同校ラグビー部コーチ、監督を務める。全国高校ラグビー大会に4度出場、最高成績は4強。1996、1997年高校日本代表監督としてスコットランド、フランスに遠征。これまでに大阪府高体連ラグビー専門部委員長、近畿高体連ラグビー専門部委員長を歴任し、現在は全国高校ラグビー大会シード委員長を務めている。

高木 智 先生（香川県立高松北高校ラグビー部監督）

1966年、兵庫県尼崎市生まれ。尼崎北高校入学後、友人から誘われてラグビー部に入部。大阪体育大学3回生時にFLのリザーブとして大学選手権ベスト4進出。大学4回生で主将を務める。平成元年香川県立高松北高校に赴任しラグビー同好会設立。平成2年4月にラグビー部に昇格し新人大会優勝。平成5年第73回全国高校ラグビー大会初出場。15回目出場の令和6年第103回全国高校ラグビー大会1回戦で倉吉東と対戦して48-3で花園初勝利。香川県ラグビー協会理事、コーチ委員長、高校委員長、香川県高体連ラグビー専門部委員長、四国高体連ラグビー専門部委員長を歴任。日本ラグビー協会A級コーチ、日本スポーツ協会ラグビーコーチ3

藤原 幹治 先生（敦賀工業高校ラグビー部監督）

1970年9月25日生まれ、1989年3月 神戸高校卒 1994年3月 京都教育大学卒
小中学時代は野球、高校からラグビーを始める。
ポジションは高校センター、大学スタンドオフ
1995年～96年 兵庫県立川西明峰高等学校ラグビー部監督（2年間）
2007年～現在 福井県立敦賀工業高等学校ラグビー部監督（17年間）
現在、福井県ラグビーフットボール協会理事 コーチ委員長

5. 一般発表(口頭)抄録

会場(SA202)・タイムテーブル

座長 寺田 泰人 高津 浩彰	
10:30	ラグビー日本代表ヘッドコーチの役割に関する研究 高岡 慎一郎 (甲南大学ビジネスイノベーション研究所)
10:50	フランスラグビーの真の心臓部がここにある —現代フランスラグビー発展の文化地理学的研究— 山碕 敦司 (ラグビー人類学研究談話会)
休憩 : 10分	
座長 青木敦英 入江直樹	
11:00	スポーツ・ライフ・バランスについて —大学ラグビー選手のスポーツと生活の調和— 高田 正義 (愛知学院大学) 他 4名
11:20	運動部の不祥事に対する連帯責任について 高田 正義 (愛知学院大学) 他 4名
11:40	旧制甲南高等学校創始者 平生鈞三郎の教育理念とラグビー館 ～日記の記述を中心にして～ 西村 克己 (追手門学院大学) 他 1名

ラグビー日本代表ヘッドコーチの役割に関する研究

高岡慎一郎（甲南大学ビジネスイノベーション研究所）

【キーワード】 日本代表 ヘッドコーチ 役割 経営者

1. 本研究の目的

2007年にカーワン(John Kirwan)がヘッドコーチに就任して以降、日本代表は着実に力をつけ、常に世界ランキング10位以内を窺う水準のチームとなった。本研究の目的は、この間のヘッドコーチの役割について、経営者との比較を通じて理解を深めることである。

2. 先行研究

ヘッドコーチと経営者では、大きな権限や結果責任、限られたリソースでの運営などの観点で役割に関する類似点が見受けられる。それゆえ、経営者の役割に関する先行研究を検討した結果、「ビジョンの発信」「業務管理」「人間関係構築」「人材育成」の4つが抽出された。

3. 調査対象と分析方法

調査対象は、ラグビー日本代表のヘッドコーチを務めたカーワン(John Kirwan)、ジョーンズ(Eddie Jones)、ジョセフ(Jamie Joseph)の3名であり、データは一般情報を二次分析しているものである。

手法としては、質的分析方法を参考に分析を行った。

4. 分析結果

調査対象の3人のデータを分析する中で、共通に行っている役割として浮かび上がったのは「明確なゴール設定とマインドセット」「チームワーク強化」「徹底的なトレーニング」「ダイバーシティマネジメント」の4点であった。

5. 考察

先行研究と分析結果の比較を行ったところ、先行研究における「ビジョンの発信」「人間関係構築」「人材開発」と、分析結果の「明確なゴール設定とマインドセット」「チームワーク強化」「徹底的なトレーニング」はそれぞれ類似しており、これらは、いずれも共通に、組織のリーダーとして重要な役割であると考えられる。一方で、「業績管理」は先行研究にのみ見られた

が、これはマネジメント全般はGM職が担う体制であることに起因すると想定される。また、「ダイバーシティマネジメント」は分析結果にのみ見られる役割であるが、日本代表が多様性に富んだ組織であることから現れていると言えよう。

先行研究 (経営者)	分析結果 (ヘッドコーチ)	考察
ビジョンの 発信	明確なゴール設定と マインドセット	類似した役割
人間関係構築	チームワーク強化	
人材開発	徹底的なトレーニング	
業務管理	-	ヘッドコーチとGM との役割分担が背景 と考えられる。
-	ダイバーシティ マネジメント	メンバー構成の多 様性背景と考えら れる。

また、ジョーンズとジョセフは、いずれも①チームのマインドセット、②各選手のパフォーマンス向上を目的に、メンタルコーチを招聘している。これは分析結果における、マインドセットや育成といったヘッドコーチの役割を補強する意図によるものであると考えられる。

6. まとめ

本研究は組織のリーダーの役割に関して、独自の側面から考察を行ったものであり、この結果を他分野の様々な組織におけるリーダーの研究への援用や、研究の新領域の開拓などに活用されることが期待される。

一方で、サンプル数が少ないこと、一般情報によるものであること、質的な探索的調査となっていることには改善の余地があるため、今後の課題としたい。

以上



フランスラグビーの真の心臓部がここにある

～現代フランスラグビー発展の文化地理学的探究～

山崎敦司 ※



現代フランスのスポーツ文化においてひとときを興彩を放つ同国ラグビーの風土を研究し、文化人類学的・文化地理学的な

アプローチによって**観察・追跡・分析に挑む**ことは、**わが国ラグビーの未来的総合的発展のために大いなる刺激を与えるもの**と**実感**している。

この取り組みは、**長年、英語圏のラグビー強国文化(理念・思考・行動様式・コーチング・プレイヤー・戦法とそれらの有形・無形の産物のすべてを、最善のお手本として依拠・没頭し、一途に突き進んで**きた わが国ラグビー社会と選手生活の様々な側面に新鮮な示唆を与えるものと確信する。

特に豪州ワールドカップを2027年に、米国ワールドカップを2034年に控える中で「ライオン・フロン」に肉薄できず新たなラグビー国として認められたわが国にとって**フランスラグビーの研究から新しいエッセンス(ESPRIT)を学び取り、立体的な情報提供、ビジネスシステムの進化、合理的な競技力強化を進めることが重要な課題のひとつである**とも考える。

日本人の強いスピリッツと、英語圏上位国のすばらしい実績と経緯値に加えて、フランスラグビーの風土「熱い魂とラグビー愛」を感じ取ることができれば【魂に金棒】であろう。

他分野の研究のありさまや実績に学びつつも、この種の調査・観察・研究活動は、数値によって語りつくすことが困難で、かつ短期間で容易に考察を展開できるものではない。

今次の【フランスラグビーの文化地理を軸とする研究】は、今後を長い目で見れば、本来は壮大な中期構想を建立して、むしろフランス国内のラグビー活動の当事者たち、またその研究者たち(民族性研究・社会心理学・文化人類学など)とともに、彼らのたすけを得て徐々に基盤を作り上げてゆくべきものであろう。

本研究に着手するにあたり、同じフランス共和国内にあっても、独自の民族性と(バウ)を放ち続ける【南西フランスエリア】が、独立精神と自治志向旺盛にして、中央政府による様々な統括・規制や行政の取り組みとは常に一定の距離を置きながら、スポーツ愛好の文化伝統と生活風土を守り、旺盛な生命力を秘め、ユニークで創造力豊かなラグビーのプレー特質に独特の磨きをかけ続けてきたことに大いに注目したいと感じた。

この【南西フランスエリア】は、単なる「ラグビー好きを地カ」として好奇心をもって観察する対象ではなく【フランスラグビー繁栄の源泉 □ 真の心臓部】と見て観察すべきである。

我々は今回、この南西フランス地方がフランスラグビーの歴史、そして進化と発展を力強くけん引し続け、その独自性と力量を誇示してきたことに特に着目した。

当然のことながら、この【南西フランスのラグビー心臓部】は同エリアに110年以上前にラグビーが浸透した結果、現況ワールドカップを問わず大活躍を果せるフランスラグビー全体においても極めて貴重な刺激を与え続けてきたのであり、ヨーロッパとフランスラグビー文化の発達史の中でも、特別の地位を与えられるべきものである。

例えば、同地域では毎年のようにカ自慢のプロトタイプ「ラグビー」の地位が目まぐるしく入れ替わっており、それら有カチームからたくましく若い代表選手たちが奇跡のように出現し、ラストマッチで所狭しと大活躍する。そのかたわらで、この南西地方圏の各都市においては、依然アマチュア軍団の選手数は増え続け、ラグビーを心から楽しんでるのである。

このSUD-OUEST (南西フランス地域)と通称される地域圏こそ、真のフランスラグビーの心臓部であり、中央共和政府(パリ)と北半分の地域圏とは異なり、独自の歴史と文化(思考・行動の様式とその有形・無形のすべての産物)をベースに発達し、進化を続け、フランスラグビー全体に最適な刺激を与え続けてきた。

なかでも、Occitanie(オクシタニ)地方、そしてNouvelle-Aquitaine (ヌヴェル・アキテーヌ)地方においては、ラグビーが全市長の人気と支持を獲得し、最近50年間で建設された大いなるラグビー王国であるという事実に興味が強く、そそれらと同時に、客観的・批判的なアプローチ(接近・観察・分析)によってその文化風土の神髄を明確にすべきであると感した。

実は2023年地元開催のワールドカップの指導陣と代表選手はこの地域の出身者が多かった。・ いったい何が、この南西フランスのラグビーを豊かにさせたのであろうか。

さらにこれらの盛況を取り巻き、その状況を一層意欲的に盛り上げてきた「クラク」【企業】、【地域社会のフロン】、【家族】、そして【同志たちの複合的な集合体としての【ラグビー風土】】こそ、今後のフランスラグビーの深い文化研究、そして同時に「日本ラグビーのビジネス・モデル」【将来のラグビー社会のさらなる成熟】のための真摯な学び取りに欠かせない要件のひとつである。

フランスのラグビー、またこの南西フランスの地域社会のラグビー自体が、貴重な文化資産であることをとらえなおし、その真髄としてのエスプリ ESPRITを再び学びなおし、その心臓部の持っている魅力=ゆるぎない【魂】が、国家・思想・信念・性別を越えた市民生活の【生きがい】【誇り】【熱意】【愛情】であることを、総会ご出席の諸先生方とともに実感してみたいと願っている。

※ 筑波大学 体育専門学群 第一期生(1978卒)

※ オクシタニ地域圏 AS Béziers Hérault クラク(現D-2グループ)元研修員(1995)

※ ラグビー人権学研究会 主宰

神奈川県相模原市中央区東淵野辺在住

スポーツ・ライフ・バランスについて

大学ラグビー選手のスポーツと生活の調和

高田正義 (愛知学院大学)、岡本昌也 (愛知工業大学)、寺田泰人 (桜花学園大学)、
早坂一成 (名古屋学院大学)、高津浩彰 (豊田工業高等専門学校)

キーワード：大学アスリート、スポーツ・ライフ・バランス、TEM

【目的】

大学スポーツは、スポーツを通じて社会の発展を支える存在として、今後も重要な位置を占めると考えられる。そのような中で、大学アスリートにかかる様々な負担を看過することは出来ないであろう。多くの時間が競技生活に費やされ、学業不振、就職活動、学生生活が円滑に行うことができない場合も少なくない。優秀な選手ほど、多忙な競技生活を送りがちになり、場合によっては授業の欠席を余儀なくされることもある。留年や卒業不可などの問題により、競技に集中できないこともあるだろう。社会の要請に応えるために、競技でも学業でも結果を求められているのである。

本研究では向井らの質的データを参考に大学アスリートのための「スポーツ・ライフ・バランス・モデル」を作成することを目的とする。

【手続き】

対象者：大学ラグビー部員5名を対象にした。

調査内容：インタビュー調査を行った。

処 理：複線経路・等至性モデル (TEM :

Trajectory Equifinality Model) による心理プロセスの分析を行った。

【結果と考察】

対象となった大学ラグビー部員は、部活動においても私生活においても充実している傾向を示した。当初は、休日や自由な時間を要求するのではないかと予測していたが、意外な傾向を示していた。意識が分岐していたのは、「練習の質」、「十分な休息」、「部活動と学業の両立」であった。全体的に概観すれば、「練習の質」と「十分な休息」、さらに「部活動と学業の両立」が相互に関係しているように予測することができる。充実した大学生を送るためには、この3要因が重要な意味を含んでいる可能性がある。

図1. 仮設モデル

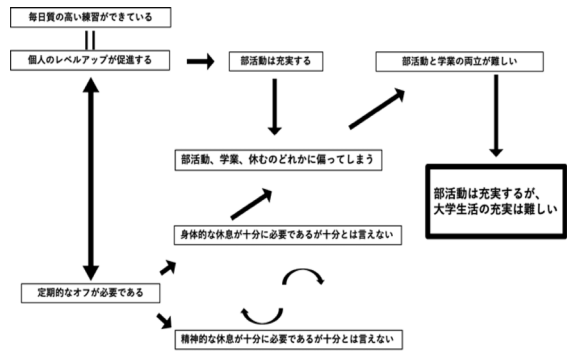
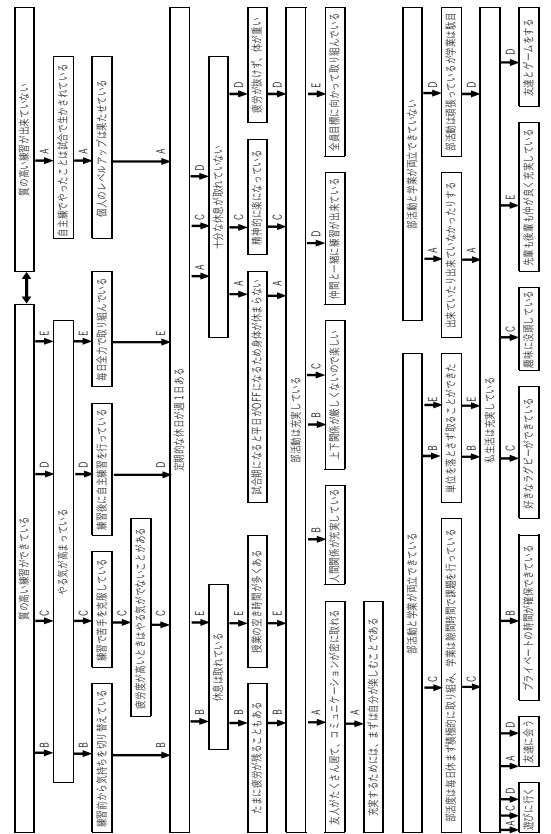


図2. TEMによる心理プロセス



運動部の不祥事に対する連帯責任について

高田正義（愛知学院大学）、岡本昌也（愛知工業大学）、寺田泰人（桜花学園大学）、
早坂一成（名古屋学院大学）、高津浩彰（豊田工業高等専門学校）

キーワード：連帯責任、同志集団モデル、社会的絆理論、KJ法

【目的】

運動部員の一部が不祥事を起こすと、反射的に連帯責任を科す風潮が散見される。一方で、連帯責任は理不尽であり、旧態依然の日本独特の文化であるという批評も耳にする。最近、盛んに吹聴される企業の「社会的責任」や「コンプライアンス」の問題とは異なる問題なのだろうか。「同様の目的や見解を共有し、互いに同志として認識している集団」を、同志集団モデル（the like-minded group model）に該当する集団として考えることができる（Miller,2007）。このモデルを手掛かりにすることで、連帯責任を考察することは有効であると考えられる。本研究では、大学運動部の不祥事に対する連帯責任について考察することを目的とする。

【手続き】

対象者：大学生 25 名を対象に自由記述アンケートを実施した。

調査内容：「運動部の不祥事に関して、連帯責任は必要性について」を実施した。

処 理：KJ法によって、内容を検討した。

【結果と考察】

連帯責任の要・不要を質問したところ図1のように、必要が18件（75%）、不要が6件（25%）となった。予想に反し、連帯責任を必要と考える傾向が強いことが示された。自由記述内容を、KJ法によって分類を行ったところ図2のように、きれいなグレデーションを示した。連帯責任の問題に対しては、単純に要・不要を判断することができないような内容であることが窺われる。

犯罪に関する抑止力として、Hirschi (1969) の社会的絆理論が参考となる。連帯責任に関して考察する際、この社会的絆理論がある程度の参考となると考えられる。

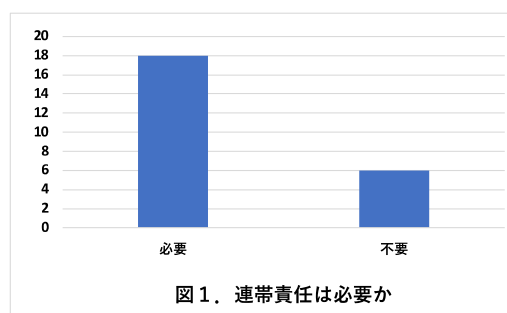
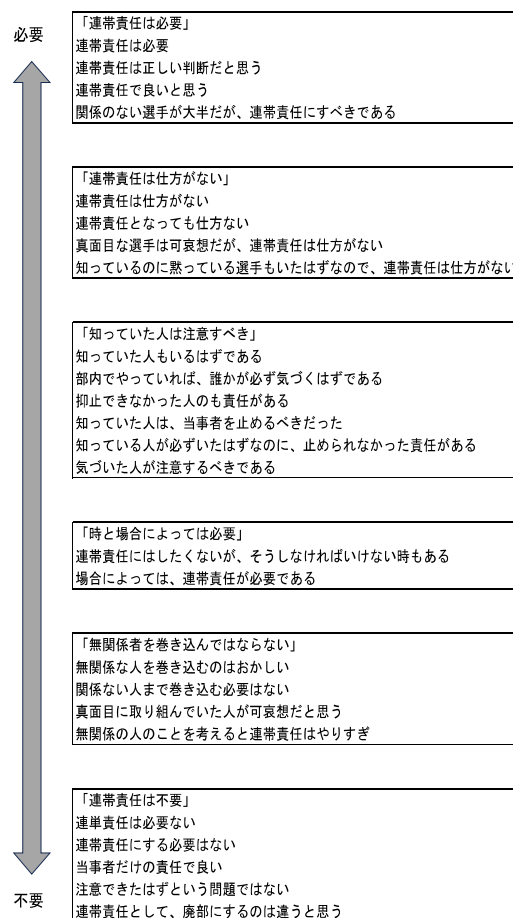


図2. 連帯責任について、どう思うか（KJ法）



旧制甲南高等学校創設者
平生鈞三郎の教育理念とラグビー観
～日記の記述を中心にして～

○西村克美 高木應光

はじめに

今年度、旧制・甲南高等学校が創立 100 周年を迎えた。創設者は、平生鈞三郎（以下、平生）である。

平生は盛んにラグビー・フットボール（以下、ラグビー）を奨励した。自身は、全くラグビー経験が無い。なぜ、平生はスポーツ、それもラグビーを奨励したのか。これ等の疑問を解くことで、教育とスポーツの関係は、どうあるべきか、またラグビーの教育的価値について再考することが可能となるのではないかと考えた。

研究方法

本論のテーマについての先行研究はほとんどない。かろうじて示すなら、三宅 遵「平生鈞三郎とスポーツ」『平生鈞三郎日記 第 17 卷附録』である。三宅氏の論考も参考にしながら、筆者らは『平生鈞三郎 日記 1～18 卷、補巻』（全 13, 419 ページ）を本論研究の主たる対象とした。

考察

平生鈞三郎は慶応 2 年 5 月 22 日（1866 年 7 月 4 日）、生を受けた。父が武家に養子に入り、武家で育ったため平生は不正、不義、卑怯を憎み、一寸の仮借も許さない態度、武士道精神を身に付けていった。

苦学の末に東京高商を卒業、高校の校長や東京海上に勤務。その後、大正 12 年に甲南高校の創設に尽力する。

当時注目されていたスペンサーの『教育論：知徳体』の 3 要素を「徳体知」と換え、甲南教育の柱とした。

甲南の教育はスポーツを奨励、平生自身も学生時代よりボート、ゴルフ、登山、野球などを楽

しんでいる。

イギリスへの留学経験や大正 14 年のイギリス視察で、イギリスの教育における家庭教育の重要性やスポーツマンシップに触れ、甲南高校でもこれらを取り入れることを決心する。スポーツマンシップは、日本の武士道精神とも相通じるものがあると感じていた。

そして、東京高商の後輩、椎名時四郎（後日本ラグビー協会会長）に宛てた手紙に、「小生が各種の sports の中にてラグビー蹴球を推奨いたしますのは、この sportsこそ我が青年に武士道的訓練をなし紳士的精神を涵養し得るものと考えたからであります」と記している。青年の人格形成・陶冶と体力の育成に最も適したスポーツとしてラグビーを考えていたようである。また、日記には息子三郎（甲南→京大、元日本代表）の試合観戦や「幻のトライ伝説」などのエピソードを認めている。又、甲南高校のスポーツの盛んな校風は、多方面で多くのトッププレイヤーを誕生させている。

学業も優秀であった。甲南高校の教育には、体力、精神面の涵養を軸にして個性尊重が重視され、角谷静雄（ラグビー部員、数学者）や堀場雅夫（堀場製作所）など、個性的な人物を多く輩出している。

まとめ

平生はイギリスの教育をヒントにスポーツによる人格形成・陶冶並びに体力の増進を目指した。その結果、スポーツ並びに社会に有能な人材を多く輩出することとなった。甲南高校の教育はスポーツによる人材育成を実現したといえるであろう。